

## 外国人学生の日本社会での適応感

早 矢 仕 彩 子<sup>1)</sup>

### 1. 問題と研究の目的

近年、国際化が叫ばれるようになり、それに伴って経済、技術のみならず文化的交流も国の内外で盛んに行われるようになってきた。個人における異文化接触の機会の増加も著しい。異文化接触時には個人の心理面にも様々の影響が及ぼされるが、特に異文化圏への地理的移動をしたときの適応上の困難が注目を集めている。困難を和らげて異文化への適応をスムーズにするため、異文化圏移住前の学習・訓練の必要性なども唱えられ、国外に出る日本人には主として企業内研修の形でその実施もなされるようになってきている(原, 1987)。日本に来る外国人についてのこの視点からの研究は最近までほとんどされることがなかったが、最近ようやく、外国人留学生の日本における異文化接触時のストレス、不適応に対する積極的な姿勢、対処への視点を持った研究がなされるようになって来ている。留学生に不適応の原因となるストレスの調査研究(モイヤー, 1987; 姚・松原, 1990)、留学生の適応過程や適応状況についての研究(上原, 1988, 1992; 佐野, 1990)などである。

近年異文化適応を考える際に“ソーシャルスキル”という概念を導入することが極めて有用であるとの主張(Argyle, 1979; Furnham & Bochner, 1986; 斉藤, 1988)がなされ、異文化接触時のソーシャルスキルについての研究がいくつかなされている。田中ら(1992)は、“ソーシャルスキル欠損による異文化不適応モデル”を提出しているが、それは、新しい土地でのスキル欠損→行動の意味読みとり不能、混乱→不安、自分自身の価値への疑い、自信喪失→試行錯誤、スキル理解習得→効果的対処→心理的安定、有能性発揮、自己実現の可能性増大→異文化適応の完成、の過程を経ると説明され、異文化圏でのソーシャルスキルの不足によって引き起こされる自己の無能感を介する不適応、ソーシャルスキル獲得による有能感形成と適応を示唆している。カルチャーショックの研究においても無能感は要因の一

つとして挙げられており(Taft, 1977)、異文化環境で自己の能力を如何に把握しているかは適応に影響すると考えられる。

ボック(1977)は環境への適応という場合、その環境には物理的環境、社会的環境、自己の内的環境の3つがあると述べている。内的環境への適応とは、「自分との折り合い」と言い換えることができる。異文化圏では自己をとりまく状況や人々が自国とは大きく異なっているから、自己認知・自己評価は自文化圏でのそれとは大きく異なっている可能性があるが、必ずしも満足できるものではないかも知れない異文化圏に於ける自己認知・自己評価に、どの程度折り合ってそれを受容できているか、それが異文化圏での内的環境への適応度ということになるだろう。

この研究は、外国人学生の社会生活をしていく上でのスキルの獲得程度や能力などに関する自己認知が、その社会での適応感にどのように影響を及ぼしているかについて検討しようとするものである。

### 2. 概念定義と仮説

#### 2-1 異文化圏における自己認知

下記の4つの側面についていかに自己を認知しているかをとらえ、適応感との関連を見ることにした。その理由とそれぞれの概念を以下に記した。

##### (1) 自己効力感

Banduraは「自己効力感は行動変化を決定する最大なものである。何となればそれは、行動をおこすかどうかの決定、それに対する努力の量、うまく行かない場合における努力持続期間を決定するものであるからである。」と述べている(Bandura, 1977)。自己効力感は目的達成のための努力行動の意志の大きさ、持続に大きく関わっている。また、心理治療における行動変化と自己効力感の変化に正の相関があるとの研究結果が多く提出されており(Bandura, 1977; Bandura et al, 1977; Bandura et al, 1980)、不適応改善と自己効力感の増加とが密接な関係があることが示されている。

自己効力感は本来はある場面のみについていう概念と

1) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生

して提出されたものであるが、次第に一般化された広い概念としてとらえられるようになって来ている（桜井，1987；Sherer et al, 1982）。また一般的自己効力感の大小は新場面における習熟期待に影響するということが実証されてもいる（Sherer et al, 1982）。あることがうまく行くとそれは自己効力感の増加を生み、ある一分野における行動習熟経験は他の分野の行動に対しても一般化されるというこれらの研究結果から、新場面との遭遇の連続である異文化接触の場面においても、次のことが考えられる。異文化接触後のある一時点における自己効力感とはそれまでに体験した異文化圏での行動の結果によって影響を受けており、その自己効力感とはそれ以後の行動に大きく影響を与えるであろう。従って、自国にいたときの自己効力感と来日後の自己効力感を検討することによって、異文化圏である日本に来て以降の個人の内的体験を推測することがある程度可能で、その時点での自己効力感とは、またそれ以後の当該個人の行動を予測する指標となっている可能性が高い。以上によりこの研究では、自己の能力に関する認知の指標として自己効力感を用いて検討することとした。

## (2) 社会生活スキル

ある社会における行動の様式のうち対人的なコミュニケーションの方法はソーシャルスキル（社会的技能）と呼ばれているが、その技能は対人関係の成立・維持・発展に大きく関わるものである。

異文化圏で生活するとき、その文化圏の人々とよい関係を持てるかどうか豊かに楽しく暮らすことと密接な関係にあることは疑う由もない。ソーシャルスキルを多く持つものは自文化圏におけると同様、異文化圏においても豊かな対人関係をつくることに長け、ソーシャルスキルの少ない人に比べると人々に囲まれて適応して暮らすことができるだろう。前記のように近年ソーシャルスキルの概念を異文化適応に導入することが極めて有用であるとの主張（Argyle, 1979；Furnham & Bochner, 1986；斉藤，1988）がされるようになった所以である。また、ソーシャルスキルの多少によって異文化圏に移り住んだときに受けることのできるソーシャルサポートの量が異なるということもいわれている（Fontaine, 1986；高井，1991）。

しかし、異文化圏での対人関係はソーシャルスキルの多少以外に他の重要な要因によっても左右される。それは言語能力の問題であったり、行動様式の差異であったり、価値観や思考体系の差異であったり、相手文化に対する知識・理解であったりする。異文化圏の人間同士の文化の違いによる意図しない誤解や行き違いの例を記述した書物文献は枚挙にいとまがない。

本研究では、これらの文化的差異に起因する困難への対処能力を含めた対人的能力を「異文化接触時のソーシャルスキル」とする。また異文化圏で生活するためには対人的能力の他に「その社会のシステムを理解してその社会の中で生活する日常生活スキル（買い物、移動、情報収集などのためのスキル）」というべきものも大切なスキルとして必要である。そこでこの二つを併せたものを「異文化接触時の社会生活スキル」と定義し、以後「社会生活スキル」との語はこの対人関係スキルと日常生活のスキルをあわせたものを意味する。

## (3) 自国自文化肯定意識

本研究では異文化接触時に特異なものを見ていくという目的からして、それまでに育ってきた文化圏の中で当然のこととして受け入れてきた自文化への感情、異文化圏に移動することによってあらためて強く意識させられるに相違ない自国自民族の一員であることへの感情、を取り上げた。自分が外国人であるということ、また自分が属している国や民族、その文化を如何に肯定的にとらえているかは、異文化圏で生活するときの心理的安定に大きく影響する要因の一つであると考えられるからである。

## (4) 自文化と日本文化に対する態度

個人が異文化と自文化に対してどのような態度で接するかによって、異文化圏で受けるカルチャーショックの量や質が異なるという説が提出されている（近藤，1981）。その地の生活スタイルになじみ、その地の食物をとり、現地の人と交わり、その地の文化にあった考え方や行動を学び、できるだけ現地の人と同じように暮らしたいと志向する人（同化主義者）と、自分には身についた自文化がありそれを尊重しているので異文化圏で生活しているからと言って考え方や行動様式を現地に合わせて変えようとは思わないと考えている人（自文化中心主義者）の受けるカルチャーショックが同様でないであろうことは想像に難くない。そこで、同化主義、自文化中心主義、折衷主義という3態度に分ける分類を一步進めて、折衷主義を、ある程度は現地文化に合わせなければ暮らしにくいから仕方がないとする消極的折衷主義と、両文化を知るという折角のチャンスを生かして自分独自の思考・行動様式を創り出していこうとする積極的折衷主義とに分離して、同化主義、自文化中心主義、消極的折衷主義、積極的折衷主義の4態度を設定、態度の違いが異文化圏での自己認知や適応に差を生じさせているかどうかを見る。

## 2-2 仮説

自国での自己効力感（回想）、社会生活スキル（回想）、

異文化圏（日本）に移動してからの自己効力感、日本での社会生活スキル、日本における社会生活スキル獲得目標、自国自文化肯定意識、自文化と日本文化に対する態度、適応感、を測定するとそれらの間には次のような関係が想定できる。

- ①自己効力感の高さは社会生活スキルの高さによって影響されるだろう。すなわち、自国で社会生活スキルが高かったとしている者はおそらく自国内での社会生活でも成功体験が多く、その結果自己効力感も高かっただろう。また、日本で自己の社会生活スキルを高いとしているものは、現在の自己効力感をも高いとしているだろう。
- ②自己効力感の高さは適応感に対して促進的に働き、現在の自己効力感の高いものほど適応感がよいだろう。異文化圏に移動してからの社会生活スキルは高いほど、また自己効力感が高いほど適応感は高くなるだろう。逆に社会生活スキルの獲得が進まない意識しており、自己効力感の低い者の適応感は低いだろう。
- ③自国での自己効力感の高さは自国自文化に対する肯定感情を高めるだろう。すなわち自国で自己効力感が高かったと意識している者は自国内での適応はよかったと考えられ、自国での住み心地よく自国自文化に対する肯定感が高いだろう。
- ④異文化圏に移動してからの社会生活スキルは異文化圏での社会システムの違い、言語の違い、文化の違い、思考・行動様式の違い、価値観の違い、物理的環境の違いなどにより影響を受けるため、自国における社会生活スキルと比較して日本での社会生活スキルは大幅に低い水準であると意識されると思われる。その結果、異文化圏に移動してからの自己効力感の水準は、自国での自己効力感の水準に比較して低くなっている者が多いだろう。
- ⑤日本での社会生活スキル目標が高すぎる者は、自己効力感が低くなって適応感の低下を招き、目標が低い者の方が適応感が高いだろう。つまり、高すぎる目標を持った者は適応感が低く、目標の低い者の方が適応感が高いだろう。
- ⑥目標の高さは自文化日本文化に対する態度に影響されるだろう。つまり日本文化をできるだけ身につけたいと考えるもの（その極端は同化主義）は自国にいたときと同程度までの高い目標を設定し、また自文化中心主義のものは低い水準に設定しているだろう。
- ⑦自国自文化に対する肯定意識は適応感に対して促進的に働くであろう。社会生活スキル獲得がままならず自己効力感の低い者でも、自国自文化に対する肯定意識の高いものは、適応感はまだ低いだろう。

### 3. 質問紙の作成

#### 3-1 尺度の構成・項目の選定

##### (1) 尺度の構成

質問紙は①フェースシート部分、②自国自文化への肯定意識尺度8項目、③適応感尺度23項目、④現在の自己効力感尺度17項目、⑤自国での自己効力感回想尺度17項目、⑥現在の社会生活スキル自己評価尺度20項目、⑦自国での社会生活スキル回想評価尺度20項目、⑧日本での社会生活スキル目標尺度20項目、⑨自文化と日本文化に対する態度4項目から成り、②～⑧はすべて6段階評価、⑨は択一とした。②～⑧で125の評価値、⑨で選ばれた選択肢の番号が得られるよう構成した。

##### (2) 項目の選定

##### ②自国自文化肯定意識尺度

自己の属する国、民族、文化に対する肯定的意識の下位領域として、a) 国、民族、文化に対する誇り、b) 国、民族、文化に対する愛着、c) 国、民族、文化に対する評価、d) 国、民族、文化の代表としての意識を設定し、各種単行本と外国人学生達との個人的かわりでの体験、異文化体験を綴った個人の日記、などを参考にして独自に作成した。

##### ③適応感尺度

留学生の日本社会に対する適応感を左右する領域として岩男・萩原は、日本社会、文化教育、の3領域における8つの事項を挙げている（岩男・萩原 1988）。山本はBaker, et al のFSA (Freshman's Scale of Adjustment) を参考にして滞米日本人留学生の適応尺度を作成している（山本, 1986）。上原はBaker, et al のFSA と山本の尺度を参考にして、学習・研究、心身健康・情緒、言語、対人関係、文化、住み心地・経済の6領域からなる56項目の在日留学生適応尺度を作成している（上原, 1988）。ヒックスはやはりBaker, et al のFSA を参考にして滞日外国人留学生の適応尺度を作成している（ヒックス, 1988）。本研究ではこれらの尺度、コーネルメディカルインデックス (CMI) の項目等から、情緒・身体的適応の領域、学校・学習適応の領域、対人関係適応の領域、文化・言語適応の領域、住み心地領域に関する23項目を選定し、日本語学校生徒に適した表現に改変して用いた。

##### ④現在の自己効力感尺度

一般化された自己効力感の測度としてSherer らの自己効力感測定尺度 (17+6=23項目) から general-efficacy 17項目を採用した (Sherer et al, 1982)。日本語に翻訳され改訂されたものとしては桜井の11項目のものがあるが（桜井, 1987）児童用であること、本研究

で提供される質問紙は日本語ではなく母語または使い慣れた言語のものになるところからオリジナルの英語版を参考にした。

#### ⑤国での自己効力感回想尺度

④の現在の自己効力感尺度と全く同じ項目を用いた。

#### ⑥現在の社会生活スキル尺度

日本で暮らし始めて間もない外国人にとっての社会生活スキルは、大きく分けて次の4つが考えられる。a) 日常生活スキル：社会生活をしていくスキルのうち、行動そのものや行動の結果が主な目的であるもの。買い物、移動、情報収集のためのスキルなど日常生活を想定して独自に作成した。b) 対人関係スキル（ソーシャルスキル）：人との関係をうまく作り、また人とうまくつき合っていくためのスキル、基本的にその人が持っている自文化圏から異文化圏に移住したからといって変わらない対人関係スキルについては菊池による Kiss-18 を参考にした（菊池、1988）。c) コミュニケーションスキル：まわりの人達と意思疎通をするためのスキル。言語能力（聞く話す読む書く）の問題が大きい。また、日本独特のコミュニケーション様式のためにで外国人にとっては習得がむずかしいとされているスキルもある。読み書き、聞く話すスキルの直接自己評定項目と在日外国人留学生対象の先行研究結果（モイヤー、1987；田中ら、1992）を参考にした。d) 文化にかなった行動のためのスキル：在日外国人留学生対象の先行研究結果（佐野、1990；田中ら、1990、1992）を参考にした。以上のような4領域にわたる全20項目の社会生活スキルの自己評定尺度を作成した。

#### ⑦国での社会生活スキル回想尺度

⑥の現在の社会生活スキル尺度の項目に対応したものを作成。すべて自国内、母語によるとの表現に改変した。

#### ⑧今後日本での社会生活スキル目標尺度

⑥の現在の社会生活スキル自己評定尺度の項目と全く同じものを教示を変えて使用した。

#### ⑨自文化と日本文化に対する態度

自文化中心主義、消極的折衷主義、積極的折衷主義、同化主義の4つの立場を表す主張を文章化して選択肢を作成した。

以上のようにして日本語版の質問紙を作成した。それをそれぞれの言語と日本語の両言語に堪能な翻訳者に依頼して中国語、韓国語、英語、スペイン語の4カ国語に翻訳をした。さらに、翻訳の微妙なニュアンスの一致をはかるために別の翻訳者にバックトランスレーションを依頼、表現の違いや翻訳のミスはないかのチェックを行い、双方の翻訳者と相談の上、翻訳の訂正・改変をした。

## 3 調査手続きと対象者

### 3-1 調査時期

平成4年9月下旬～平成4年12月上旬

### 3-2 調査対象

名古屋市内の日本語学校4校、愛知県下の日本語学校1校、東京都内の日本語学校1校、京都市内の日本語学校1校、計7校のいずれも全日制日本語学校の生徒

### 3-3 調査手続き

クラス在籍者の国籍母語に合わせて、各言語の調査紙を人数分だけ準備して各学校に持参した。配布と記入後の回収は各クラス担任や授業担当の日本語教師に依頼した。調査協力は本人の自由意志に従い、記名は求めなかった。

### 3-4 分析対象者

以上のような手続きを経て回収された有効回答383名分のデータを分析の対象とした。回答者の国籍は多い順に、中国166 韓国92 台湾64 香港15 マレーシア9 インドネシア7 イギリス6 アメリカ4 カナダ2 ミャンマー2 フランス2 オーストラリア1 フィリピン1 タイ1 シンガポール1 不明10であった。年齢幅は18歳から37歳である。

## 4 結果と考察

### 4-1 因子分析による尺度の検討

得られたデータを用いて各尺度毎に主因子法により因子分析を行ない、尺度の検討をした。因子分析の結果は表1～表7の通りである。

因子分析の結果、尺度②においては項目3の因子負荷量がマイナスとなっており、意図した意味に理解されなかった可能性が高い。この理由は表現が直接的でなかったためかまたは翻訳の問題のどちらかの理由によると思われるが、この尺度の項目として適切ではなかったと判断、項目3は除去した。尺度③については項目24、17、31の因子負荷が低い。内部整合性を求めるならばこれを除去すべきと考えられたが、外国人学生のできるだけ多領域における適応感を入れて構成するという尺度構成の際の意図からこれらを除去せず用いることとした。尺度④、⑤については、アメリカにおける Sherer らの研究ではこれら17項目は一因子性がありいずれの項目も因子に対して高い負荷量を示し、妥当性のある尺度として報告されている。今回の結果では項目39の因子負荷量が少し低い傾向があったがおおむね Sherer らの結果と一

表1 自国自文化肯定意識尺度因子分析結果

	FACTOR I	共通性
5 私は日本人達に自分の国の文化を紹介したいと思う。	.696	.481
7 私は自分達の文化を子孫に大切に伝えて行きたいと思う。	.682	.475
4 私は他の国・他の民族に生まれたらよかったと思う。(R)	.662	.425
8 私は自分の国に生まれたことを幸せに思う。	.650	.414
1 私は自分の国より日本の方が好きである。(R)	.470	.222
6 自分の国の文化は日本の文化よりも劣っていると思う。(R)	.445	.198
2 私は日本では自分の国の代表として行動するつもりである。	.376	.149
3 私は日本に来る前、今よりも自分の国や民族のことをもっと誇りに思っていた。	-.390	.151
平方和	2.515	

表2 適応感尺度因子分析結果

	FACTOR I	共通性
20 不安を感じることが多い。(R)	.680	.463
11 イライラすることが多い。(R)	.640	.416
25 日本人とつき合うのはおっくうである。(R)	.586	.343
18 日本人に仲間にいれてもらえないと感じる。(R)	.501	.257
28 日本の習慣が好きではない。(R)	.501	.256
26 不平不満が少ない。	.491	.246
22 落ち込みやすい。(R)	.490	.241
15 この学校の授業に不満がある。(R)	.480	.236
30 気が散りやすい。(R)	.466	.235
27 授業中つまらないと思っている。(R)	.454	.214
23 この学校のシステムに満足している。	.412	.173
16 いつも陽気である。	.408	.157
9 よくホームシックになる。(R)	.379	.148
29 勉強を助けてくれる(日本人 or 外国人)がいる。	.376	.133
13 困ったときに相談できる人が日本にいる。	.358	.127
12 よく眠れない。(R)	.326	.121
21 学校内にいっしょに行動する友達がいない。(R)	.326	.109
10 この学校で努力して勉強していることが楽しい。	.324	.108
14 日本の生活スタイルが好きだ。	.322	.107
19 国の自然がなつかしい。(R)	.318	.091
24 先生達との関係がよくない。(R)	.279	.086
17 ちょっとしたことが気になる。(R)	.254	.071
31 私には日本の生活より国の生活の方が合っている。(R)	.248	.055
平方和	4.394	

致していたため、そのまま17項目を用いることとした。  
尺度⑥から尺度⑧については因子負荷の低い項目はなく、  
項目削除は行わなかった。

以上の手続きにより確定した各尺度の信頼性を検討す  
るため Cronbach の  $\alpha$  係数を計算し、尺度 1  $\alpha = .62$

尺度 2  $\alpha = .74$  尺度 3  $\alpha = .89$  尺度 4  $\alpha = .89$  尺度 5  
 $\alpha = .91$  尺度 6  $\alpha = .94$  尺度 7  $\alpha = .97$  を得た。以下  
の分析は各尺度毎に合計を求め尺度得点とし、それによっ  
て行なった。

外国人学生の日本社会での適応感

表3 現在の自己効力感尺度因子分析結果

	FACTOR I	共通性
47 私は簡単にあきらめてしまう。(R)	.759	.566
42 予期しない問題が生じたときに、私はそれらをうまく処理することができない。	.686	.470
37 私は困難に直面するのを避けてしまう。(R)	.685	.468
48 私には自分に人生に起こってくる問題のほとんどをうまく扱う能力がないように思える。(R)	.668	.446
38 もし何かがあまりに複雑そうに見えたら、私はそれをやってみようと思わないだろう。(R)	.660	.440
36 私は物事を最後までやる前にやめてしまう。(R)	.657	.433
34 私は、たとえ一度目でなにかをうまくやるができなくてももうまくいくまで努力を続ける。	.636	.408
44 私は何かに失敗したら、うまくいくようになおさら努力をする。	.614	.380
35 私は非常に大切な自分の目標を設定したときでも、それらを達成するということはめったにない。(R)	.607	.364
46 私は自分自身を信頼している人間だ。	.598	.364
41 何か新しいことを勉強しようとするとき、私は最初がうまくいかないとすぐにやめてしまう。(R)	.579	.339
43 私はそれが自分にとって難しすぎるように見えると新しいことを学ぼうとしない。(R)	.549	.297
32 何か計画をたてたら私はきっとその計画をうまくやれる、という自信がある。	.517	.279
33 私の問題点の一つは、やらなくてはいけないときにすぐにとりかかれなければならないということである。(R)	.487	.231
40 私は何かをやると決めたらすぐにとりかかる。	.469	.227
45 私は自分に物事をうまく行う能力があるかどうか不安である。(R)	.458	.199
39 私はたとえ何か楽しくないことをやるときでも、最後まできちんとやる。	.269	.073
平方和	5.983	

表4 自国での自己効力感尺度因子分析結果

	FACTOR I	共通性
54 私は困難に直面するのを避けてしまう。(R)	.716	.517
64 私は簡単にあきらめてしまう。(R)	.696	.483
53 私は物事を最後までやる前にやめてしまう。(R)	.680	.333
65 私には自分に人生に起こってくる問題のほとんどをうまく扱う能力がないように思える。(R)	.651	.425
55 もし何かがあまりに複雑そうに見えたら、私はそれをやってみようと思わないだろう。(R)	.643	.419
63 私は自分自身を信頼している人間だ。	.631	.393
58 何か新しいことを勉強しようとするとき、私は最初がうまくいかないとすぐにやめてしまう。(R)	.614	.384
59 予期しない問題が生じたときに、私はそれらをうまく処理することができない。(R)	.611	.384
60 私はそれが自分にとって難しすぎるように見えると新しいことを学ぼうとしない。(R)	.610	.380
51 私は、たとえ一度目でなにかをうまくやるができなくてももうまくいくまで努力を続ける。	.606	.367
49 何か計画をたてたら私はきっとその計画をうまくやれる、という自信がある。	.603	.364
52 私は非常に大切な自分の目標を設定したときでも、それらを達成するということはめったにない。(R)	.578	.333
61 私は何かに失敗したら、うまくいくようになおさら努力をする。	.569	.309
57 私は何かをやると決めたらすぐにとりかかる。	.538	.295
50 私の問題点の一つは、やらなくてはいけないときにすぐにとりかかれなければならないということである。(R)	.537	.282
62 私は自分に物事をうまく行う能力があるかどうか不安である。(R)	.500	.249
56 私はたとえ何か楽しくないことをやるときでも、最後まできちんとやる。	.293	.091
平方和	6.167	

表5 現在の社会生活スキル尺度因子分析結果

	FACTOR I	共通性
78 日本人たちが話しているところに参加すること	.722	.523
77 話をするとき相手と自分との上下関係を考え、それに合ったふさわしい態度をとること	.688	.479
72 日本人と日本語で話していて会話がとぎれないこと	.684	.471
76 知らない日本人とでも、すぐに会話を始めること	.684	.406
74 日本人の手助けをしたり、何かしてもらいたいことを頼むこと	.672	.448
69 相手の日本人の気持を察して、それに応じた行動をすること	.663	.437
68 自分が欲しい情報を得ること	.655	.431
71 何かを聞いたり頼んだりしたときの日本人の返事がYESなのかNOなのかを理解すること	.653	.429
84 日本語で他人と自由にコミュニケーションすること	.644	.425
67 話す相手に応じてふさわしい日本語の言葉づかいを使い分けること	.644	.401
83 日本社会の男女の役割意識に合わせて行動をすること	.625	.396
79 日本社会のシステムやルールを理解してそれに合わせて行動すること	.609	.374
70 一人で買い物をすること	.574	.320
73 日本人のことが真意なのか真意でないのかを理解すること	.535	.234
82 自分とは違った考えを持った日本人ともうまくやっていく	.529	.282
81 グループの調和を大切にするように気をつけること	.511	.275
85 日本語を読んだり書いたりすること	.503	.274
66 初めてのところまで公共交通機関を使って一人で行くこと	.502	.254
80 何か失敗したときに、日本人に謝ること	.497	.249
75 自己主張をしないで他人の意見をよく聴くこと	.385	.155
平方和	7.376	

表6 自国での社会生活スキル尺度因子分析結果

	FACTOR I	共通性
97 話をするとき相手と自分との上下関係を考え、それに合ったふさわしい態度をとること	.771	.607
99 自分達の社会のシステムやルールを理解してそれに合わせて行動すること	.768	.585
91 何かを 聞いたり頼んだりしたときの他の人の返事がYESなのかNOなのかを理解すること	.757	.574
89 相手の気持を察して、それに応じた行動をすること	.749	.568
98 他の人たちが話しているところに気軽に参加すること	.738	.566
88 自分が欲しい情報を得ること	.735	.554
93 相手のことが真意なのか真意でないのかを理解すること	.733	.534
104 母国語で他人と自由にコミュニケーションすること	.719	.526
103 自分達の社会の男女の役割意識に合わせて行動をすること	.706	.508
94 他の人の手助けをしたり、何かしてもらいたいことを頼むこと	.696	.502
92 他の人と母国語で話していて会話がとぎれないこと	.686	.491
101 グループの調和を大切にするように気をつけること	.660	.448
96 知らない他人とでも、すぐに会話を始めること	.658	.446
90 一人で買い物をすること	.655	.444
102 自分とは違った考えを持った他の人ともうまくやっていくこと	.654	.429
87 話す相手に応じてふさわしい母国語の言葉づかいを使い分ける	.648	.424
86 初めてのところまで公共交通機関を使って一人で行くこ	.594	.383
100 何か失敗したときに、他の人に謝ること	.572	.338
105 母国語を読んだり書いたりすること	.566	.331
95 自己主張をしないで他人の意見をよく聴くこと	.456	.233
平方和	9.489	

表7 日本での社会生活スキル目標尺度因子分析結果

	FACTOR I	共通性
117 話をするとき相手と自分との上下関係を考え、それに合ったふさわしい態度をとること	.891	.788
119 日本社会のシステムやルールをを理解してそれに合わせて行動すること	.877	.767
112 日本人と日本語で話していて会話がとぎれないこと	.871	.752
118 日本人たちが話しているところに参加すること	.869	.752
108 自分が欲しい情報を得ること	.864	.736
111 何かを聞いたり頼んだりしたときの日本人の返事がYESなのかNOなのかを理解すること	.861	.732
109 相手の日本人の気持ちを察して、それに応じた行動をすること	.858	.731
124 日本語で他人と自由にコミュニケーションすること	.857	.722
107 話す相手に応じてふさわしい日本語の言葉づかいを使い分ける	.849	.685
125 日本語を読んだり書いたりすること	.831	.506
113 日本人のことが真意なのかか真意でないのかを理解すること	.820	.662
116 知らない日本人とでも、すぐに会話を始めること	.917	.657
121 グループの調和を大切にするように気をつけること	.808	.648
114 日本人の手助けをしたり、何かしてもらいたいことを頼むこと	.801	.632
122 自分とは違った考えを持った日本人ともうまくやっていくこと	.776	.603
110 一人で買い物をすること	.775	.601
106 初めてのところまで公共交通機関を使って一人で行くこと	.728	.533
123 日本社会の男女の役割意識に合わせて行動をすること	.726	.514
120 何か失敗したときに、日本人に謝ること	.718	.506
115 自己主張をしないで他人の意見をよく聴くこと	.582	.347
平方和	13.121	

#### 4-2 尺度得点と尺度間相関

全被験者383名の平均尺度得点を表8に示した。また、7尺度間の内部相関を表9に示した。また質問紙から得た自文化日本文化に対する態度を表10に示した。

表9にみるように「現在の自己効力感」と「自国での自己効力感」の平均差はごく僅かであった。外国人学生達は自国における自己効力感と比較して日本に来て間もない時点での自己効力感を低い水準に意識するものが多いだろうとの仮説を持っていたが、自国での自己効力感より来日以降の自己効力感の方を高く感じている者もあり、またほとんど変わらないと感じている者も多く、差はあまり見られなかった。「現在の自己効力感」と「自国での自己効力感」の相関は.858と非常に高く、自国に住んでいたときに自己効力感が高かった（または低かった）と意識している者は現在の自己効力感も高く（低く）意識する傾向にあるようである。

「現在の社会生活スキル」、「自国での社会生活スキル」、「日本での社会生活スキル目標」の尺度得点平均値は「自国での社会生活スキル」、「日本での社会生活スキル目標」、「現在の社会生活スキル」の順に高い。「自国での社会生活スキル」と比較して「現在の社会生活ス

ル」はこの間に生じた異文化圏移動の体験により当然のことながら相当低いレベルであると意識されており、また、「日本での社会生活スキル目標」は「自国での社会生活スキル」より少し低い水準に設定しているものが多い。「現在の社会生活スキル」の値が特に低いことは、滞在期間一年未満のものが大多数を占める今回の被験者においては日本社会における自己の社会生活スキルがまだまだ相当低いレベルにあると感じているものが多いことを示している。

「現在の社会生活スキル」と「自国での社会生活スキル」、「現在の社会生活スキル」と「日本での社会生活スキル目標」、「自国での社会生活スキル」と「日本での社会生活スキル」はそれぞれ高い正の相関を示している。中でも「自国での社会生活スキル」と「日本での社会生活スキル目標」との相関が最も高いことより、「日本での社会生活スキル目標」は「自国での社会生活スキル」の水準によって規定されるところが大きいことが示唆される。また、ついで「現在の社会生活スキル」と「日本での社会生活スキル目標」の相関が高いことから被験者達は「現在の社会生活スキル」の水準をふまえた上で目標設定の検討をしているように見える。



表8 尺度平均値・標準偏差

	平均値／可能最高得点	標準偏差
自国自文化肯定意識	35.13／42	5.10
現在の自己効力感	70.62／196	12.65
自国での自己効力感（回想）	71.52／196	12.89
現在の社会生活スキル自己評定	69.66／120	14.48
自国での社会生活スキル自己評定（回想）	99.89／120	14.85
日本での社会生活スキル獲得目標	96.89／120	18.97
日本社会への適応感	86.75／138	14.39

表9 尺度間の内部相関

	自国自文化 肯定感情	現在の自 己効力感	自国での 自己効力感	現在の社会 生活スキル	自国での社 会生活スキル	目標社会 生活スキル	適 応 感
自国自文化肯定意識							
現在の自己効力感	.242***						
自国での自己効力感	.212***	.856***					
現在の社会生活スキル	.178**	.369***	.315***				
自国での社会生活スキル	.223***	.268***	.292***	.383***			
社会生活スキル目標	.185**	.156**	.170**	.412***	.548***		
適 応 感	-.024	.320***	.263***	.290***	.054	.123*	

\* p&lt;.05, \*\*p&lt;.01, \*\*\*p&lt;.001

表10 自文化・異文化への態度別平均尺度値（標準偏差）

	自文化・異文化への態度				TUKEYの検定		
	①自文化中心主義 N = 20	②消極折衷主義 N = 38	③積極折衷主義 N = 235	④同化主義 N = 64	①②	①③	①④
自国自文化肯定意識	36.44 (5.83)	34.19 (6.05)	35.48 (4.52)	33.97 (6.07)			
現在の自己効力感	76.74 (16.28)	66.34 (12.57)	71.49 (12.11)	66.78 (11.88)	*	*	*
自国での自己効力感	74.85 (17.64)	67.81 (12.14)	72.52 (12.51)	68.73 (11.87)			
現在の社会生活スキル	70.10 (13.87)	67.22 (13.20)	70.12 (14.76)	68.95 (14.05)			
自国での社会生活スキル	105.30 (12.67)	97.33 (15.20)	100.56 (14.27)	97.78 (16.92)			
社会生活スキル目標	84.80 (22.59)	91.92 (19.97)	99.11 (17.36)	94.08 (21.40)		*	
適 応 感	80.16 (22.03)	83.92 (15.47)	87.70 (13.86)	86.95 (11.73)			

\* p&lt;.05

「適応感」との相関を見ると「現在の自己効力感」との相関がいちばん高く、ついで「現在の社会生活スキル」、「自国での自己効力感」となっている。「適応感」と「自国自文化肯定意識」、「適応感」と「自国での社会生活スキル」との間はあまり相関が高くなかった。

「現在の自己効力感」と「現在の社会生活スキル」の間、「自国での自己効力感」と「自国での社会生活スキル」にもかなり高い相関関係が認められる。これは社

会生活スキルを高いと感じているものは自己効力感を高く感じるだろうという仮説と矛盾しない。「自国での社会生活スキル」が高かったと思うものは「自国での自己効力感」を高く感じる事が多く、また現在の社会生活スキルがまずまずのレベルと感じている者は「現在の自己効力感」を高く感じていることが多いと解釈できる。

自己効力感の変動が少なかったことの解釈は、自己効力感の上下は同水準内で変動する、つまり「現在の自己

効力感」は「自国での自己効力感」を基準にしてその水準からの変動と意識されているのであまり大きな変動がないという解釈、自己効力感の変動にはある程度の時間経過が必要で、来日後の期間の短い被験者ではとらえることができなかったという解釈、もしくは回想法を採用したことによる方法論的な問題、の3つの解釈が可能である。この点を明らかにするためにはさらなる調査を重ねる必要がある。

#### 4-3 デモグラフィック特性グループ間の各尺度値の差の検討

留学生のデモグラフィック要因によって適応状態が異なることが報告されている（上原，1988）。今回測定した「適応感」、「自己効力感」、「社会生活スキル」等にも被験者のデモグラフィック特性によって各尺度平均値に差がみられるかどうかを検討するため、2グループに分けたものに対してはt検定を、3グループ以上に分けたものに対しては分散分析を行い、Tukey法により平均

値の差の検定を行った。結果のうち5%水準以下で有意差が認められたものを表11、表12に示した。

年令によるグループ分けでは「自文化肯定感情」と「自己効力感」、性別では「自文化肯定感情」と「自己効力感」と「現在の社会生活スキル」、国別では中国とその他の国とを分けた場合に「自文化肯定感情」と「自己効力感」と「適応感」、日本滞在期間で「現在の社会生活スキル」、日本語能力で「自己効力感」と「現在の社会生活スキル」、経済状態で「自国自文化肯定意識」と「適応感」、異文化経験の有無で「自国自文化肯定意識」と「適応感」において有意差が認められた。これら7つのデモグラフィック要因は、「適応感」へ直接・間接的に影響を及ぼしている可能性が考えられる。

#### 4-4 重回帰分析による検討

「適応感」との間に時間的關係や影響の方向が想定できることから、「適応感」を目的変数、他を説明変数とする重回帰分析を行って、直接的な説明力の検討を行

表11 グループ別尺度得点平均値（標準偏差）及びt検定による平均値の差の検定結果

	性 別			日 本 滞 在 期 間		
	男 N = 195	女 N = 181	t 検定	- 6 月 N = 193	7 - 月 N = 183	t 検定
自国自文化肯定意識	35.71 ( 4.93)	34.37 ( 5.21)	2.52*	35.30 ( 4.90)	34.79 ( 5.33)	1.34
現在の自己効力感	72.45 (12.68)	67.57 (12.28)	3.73***	70.60 (13.02)	69.70 (12.42)	0.93
自国での自己効力感	72.99 (13.00)	69.01 (12.71)	2.93**	72.16 (12.80)	70.03 (13.14)	1.77
現在の社会生活スキル	72.05 (14.50)	66.59 (13.22)	3.73***	67.80 (13.59)	71.32 (14.64)	-2.34*
自国での社会生活スキル	101.44 (14.80)	98.42 (14.86)	1.93	100.87 (14.52)	98.91 (15.40)	1.73
社会生活スキル目標	96.87 (19.76)	95.46 (18.86)	0.70	96.41 (19.12)	96.09 (19.64)	0.50
適 応 感	86.47 (14.19)	86.50 (14.84)	-0.02	86.14 (14.11)	86.89 (15.09)	-0.49
	日 本 語 能 力			異 文 化 経 験		
	初級 N = 156	中上級 N = 218	t 検定	なし N = 232	あり N = 146	t 検定
自国自文化肯定意識	35.09 (5.19)	35.03 ( 5.07)	0.12	35.62 ( 4.85)	34.12 ( 5.38)	2.45*
現在の自己効力感	72.21 (13.33)	68.75 (12.12)	2.62**	70.99 (12.08)	68.73 (13.60)	0.00
自国での自己効力感	73.01 (13.69)	69.85 (12.36)	2.46*	71.90 (12.56)	69.78 (13.56)	-1.05
現在の社会生活スキル	65.33 (14.47)	72.23 (13.28)	-4.62***	68.35 (13.72)	70.86 (14.52)	-1.68
自国での社会生活スキル	100.23 (15.28)	99.77 (14.75)	0.50	99.49 (14.53)	100.54 (15.54)	-0.88
社会生活スキル目標	94.07 (20.26)	97.80 (18.55)	-1.62	95.73 (19.38)	96.94 (19.26)	-0.27
適 応 感	86.09 (15.17)	86.77 (14.18)	-0.52	84.14 (13.64)	90.34 (15.24)	-4.05***
	国 家 体 制					
	社会主義国家（中国） N = 166	その他の国 N = 207	t 検定			
自国自文化肯定意識	36.11 ( 4.60)	34.21 ( 5.40)	3.60***			
現在の自己効力感	72.75 (11.85)	89.41 (14.98)	-4.78***			
自国での自己効力感	73.21 (12.54)	68.16 (13.09)	3.50***			
現在の社会生活スキル	67.99 (13.58)	69.52 (13.27)	2.69**			
自国での社会生活スキル	99.65 (14.17)	70.56 (14.75)	-1.71			
社会生活スキル目標	95.08 (18.81)	100.49 (15.56)	-0.53			
適 応 感	82.35 (12.55)	97.74 (19.62)	-1.31***			

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

表12 グループ別各尺度得点平均値（標準偏差）と TUKEY 法による平均値の差の検定結果

	国・国 グ ル ー プ					TUKEY の検定		
	①中国 N=166	②台湾 N=64	③韓国 N=92	④欧米オセアニア N=15	⑤他のアジア諸国 N=43	①②	①④	①⑤
自国自文化肯定意識	36.10 ( 4.60)	33.57 ( 5.59)	35.76 ( 4.72)	33.67 ( 4.45)	32.38 ( 5.83)	*		*
現在の自己効力感	72.75 (11.85)	65.10 (12.64)	70.17 (13.73)	69.44 (11.22)	68.02 (12.16)	*		
自国での自己効力感	73.21 (12.54)	67.67 (13.44)	70.88 (13.93)	70.50 (12.64)	69.24 (11.64)	*		
現在の社会生活スキル	67.99 (13.58)	68.31 (14.67)	73.05 (14.27)	64.33 (12.79)	71.45 (14.83)			
自国での社会生活スキル	99.65 (14.17)	103.16 (12.92)	100.44 (15.88)	98.83 (15.36)	95.68 (18.00)			
社会生活スキル目標	95.08 (18.81)	99.69 (18.52)	98.60 (19.97)	93.82 (19.27)	91.30 (20.57)			
適 応 感	82.35 (12.55)	88.76 (15.68)	88.91 (14.08)	91.69 (14.18)	91.76 (17.54)	*	*	*

  

	年 齢 N = 380				TUKEY の検定	
	① -20歳 N=31	② 21-25歳 N=162	③ 26-30歳 N=128	④ 30歳- N=59	①②	①③
自国自文化肯定意識	33.44 ( 6.51)	35.52 ( 4.95)	35.40 ( 4.76)	34.28 ( 5.19)	*	
現在の自己効力感	65.24 (13.31)	69.21 (12.84)	72.48 (11.99)	70.82 (12.80)		*
自国での自己効力感	65.91 (13.73)	70.21 (12.97)	73.44 (12.47)	71.76 (12.92)		*
現在の社会生活スキル	68.58 (12.28)	69.25 (14.21)	69.98 (14.73)	69.30 (14.16)		
自国での社会生活スキル	93.78 (15.26)	99.50 (14.89)	101.61 (13.71)	101.21 (16.82)		
社会生活スキル目標	97.52 (18.53)	96.69 (19.83)	99.35 (18.53)	94.21 (20.42)		
適 応 感	85.00 (14.48)	87.22 (15.21)	86.39 (13.76)	85.45 (14.72)		

  

	経 済 状 態			TUKEY の検定	
	① 困難なし N = 173	② 少し困難 N = 147	③ 大変困難 N = 50	①②	①③
自国自文化肯定意識	33.95 ( 5.49)	35.74 ( 4.58)	36.85 ( 4.07)	*	*
現在の自己効力感	69.75 (12.88)	69.79 (12.08)	73.50 (13.28)		
自国での自己効力感	70.30 (13.57)	71.11 (12.08)	74.49 (13.21)		
現在の社会生活スキル	69.52 (14.51)	69.68 (13.59)	68.63 (15.41)		
自国での社会生活スキル	100.04 (15.44)	98.44 (14.17)	103.65 (14.06)		
社会生活スキル目標	96.82 (19.04)	95.57 (18.97)	97.96 (21.27)		
適 応 感	90.37 (15.64)	84.25 (11.57)	80.72 (15.79)	*	*

\*  $p < .05$

なった。方法は第1ステップでは上記7つのデモグラフィック要因のみ、第2ステップでは自己認知や自・他文化への態度などの内的要因を加えて行う階層的重回帰分析による。「現在の自己効力感」と「自国での自己効力感」の相関は高く、測定されたこの二つはほぼ同じものと判断されることから、重回帰分析には「現在の自己効力感」のみを用いて「自己効力感」とした。「自・他文化に関する態度」は「日本文化への積極性」に読み変えて、積極性が高いものほど大きな数値で表す順序尺度にして、説明変数として用いた。国籍については表12のように、分散分析の結果中国と台湾の学生では同じ中国語圏出身ではあるが多くの尺度で有意差があり、表11のように中国と中国以外とに分けたとき、異文化経験、経済状態などの回答に有意な差が認められたことから、現在の中国の社会状況がこれらの差を生じさせている

と考え、中国とそれ以外の国とに分けて国家体制を説明変数の一つとして用いることとした。

結果は表13の通りである。現在の適応感を説明するものとして、デモグラフィック要因のみでは全体で7%の説明率しかなく、経済状態、異文化経験以外の要因は大きな説明力を持っていない。これに対して自己認知、自・他文化への態度を加えた第2ステップではその説明率は35%と大幅に上昇した。第2ステップで「適応感」に対して直接的な寄与が認められたデモグラフィック要因は、経済状態、異文化経験の2つのみである。

この結果から、これまでの適応研究でたびたび取り上げられてきた適応に対する性差、年齢などの生来的条件、滞在期間、日本語能力などのデモグラフィックな要因と、今回問題に取り上げた自己認知や自・他文化への態度などをともに検討したとき、日本社会への適応感に

表13 適応感を目的変数とした重回帰分析の結果

説明変数	第1ステップ 標準偏回帰係数 ( $\beta$ )	第2ステップ 標準偏回帰係数 ( $\beta$ )	相関係数 ( $r$ )
年 令	.003	-.021	-.01
性 別	-.050	.000	-.01
日本語能力	-.030	-.044	.03
日本滞在期間	.017	.028	.04
異文化経験	.089	.102	.20***
経済状態	.220***	.260***	-.28***
国家体制	.089	.120	.23***
自国自文化への肯定感情		-.083	-.02
現在の自己効力感		.515***	.32***
自国での自己効力感 (回想)		-.116	.26***
現在の社会生活スキル		.207**	.29***
自国での社会生活スキル (回想)		-.191**	.05
日本での社会生活スキル目標		.144*	.12*
日本文化への積極性		.163**	.11
第1ステップ 調整済決定係数	$R^2 = .07***$		
第2ステップ 調整済決定係数	$R^2 = .35***$		
$R^2$ の第2ステップでの増加分	.28		

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ 

対しては自己認知や自・他文化への態度の寄与の方がより大きかったと言えるだろう。

## 5 討論と今後の課題

### 5-1 社会生活スキルと自己効力感と適応感の関連について

提出されていた7つの仮説に沿って考察をすすめる。

①の、自己効力感の高さは社会生活スキル獲得感の高さによって影響されるだろうという仮説については、「現在の自己効力感」と「現在の社会生活スキル」の相関は高く「自国での自己効力感」と「自国での社会生活スキル」の相関も高いところから、自己効力感と社会生活スキルとは関連があることは認められた。しかし、社会生活スキルの自己認知と連動して自己効力感の増減が直ちに起こるということは今回の結果からは認められなかった。

②の、自己効力感の高さは適応感に対して促進的に働くという仮説は、相関の高さと、重回帰分析の結果から検証されたと言ってよいだろう。

③の、「自国での自己効力感」の高さが「自国自文化肯定意識」を高めるといふ仮説は検証されたとは言えない。「現在の自己効力感」、「自国での自己効力感」と

「自国自文化肯定意識」との相関は同程度である。本研究の結果からは、「自国での自己効力感」独自でどれほど「自国自文化肯定意識」に寄与しているのかは分からなかった。「現在・自国での自己効力感」と「自国自文化肯定意識」とのあいだに正の相関があることは言え、そのことから現在のものか過去のものを問わなければ「自己効力感」と「自国自文化肯定意識」とは関連があるということしか言えない。この検討が難しくなったのは予想以上に「現在の自己効力感」と「自国での自己効力感」に重なる部分が多かったという結果に負うところが大きい。

④の、異文化圏での自己効力感とは自国よりも低くなるだろう、という仮説は検証されなかった。自国にいたときと現在の自己効力感を大きく変化したと感ずるものは少なかったようである。自己効力感の低下が予想されたほどには起こっていなかったことの理由としては以下のように多くの可能性が考えられる。その一つは日本語学校就学生である被験者達は、現実にはクラスメートはすべて外国人であり、一般日本人との接触により自己効力感が低下するような事態が起きる環境はあまりないのかも知れないということが、考えられる。また、一般的自己効力感の基礎をなす大部分は過去の長い間の経験の積

み重ねによって規定されており、近い過去における経験で動かされる部分はあまり多くないということも考えられる。また前述のように回想という方法を使ったという方法論的な問題のためであったかも知れない。

ともあれ今回の結果では、異文化圏に移動してからの自己効力感の水準は自国における自己効力感の水準と変わらない、という結果になっている。それが、今回の被験者集団のみでのことか、あるいは留学生一般についても同じであるかを確かめるためには、さらに被験者集団を変え、方法を変えて調査する必要がある。

## 5-2 目標の高さの決定と適応について

⑤「日本での社会生活スキル目標」が高すぎる者は自己効力感が低くなって適応感の低下を招き、「日本での社会生活スキル目標」が低い者は適応感はいいだろう、との仮説は検証されなかった。「日本での社会生活スキル目標」と「適応感」とに、負ではなく正の相関があった。もともと自己効力感が高い者は目標を高く設定するであろうが、自己効力感の高さは適応感の高さに寄与するので、そのような者はもともと適応感が高い、つまりは適応感の高い者が目標を高く設定する、また自己効力感が高い者が目標を高く設定するという仮説とは逆の方向のかかわりの方がより強いということを意味するのかも知れない。

また、「日本での社会生活スキル目標」との関連について言えば「現在の社会生活スキル」よりも「自国での社会生活スキル」との相関の方が高く、目標設定の際「現在の社会生活スキル」よりも「自国での社会生活スキル」の方がより基準として強く意識されているらしいといえる。

一方「日本での社会生活スキル目標」と「現在の社会生活スキル」も相関が高い。おそらく「現在の社会生活スキル」の水準によって「日本での社会生活スキル目標」が影響を受けるという面も大きいのだろう。この3つの相関が高いことにより次のようなことが考えられる。まず、最初の目標は「自国での社会生活スキル」の水準から設定され、そしてしばらく滞在しているうちに「現在の社会生活スキル」の獲得状況を見ながらその目標が修正される。よってその3者間に高い相関が見られるというものである。従って、「日本での社会生活スキル目標」と「適応感」との関係の中にもこの複雑な構造が入り込み、仮説のような一方向的な単純な働きかけをする構造ではないのだろう。社会生活スキル獲得が進み、社会生活スキルの水準が高まったと意識すると、自己効力感も高まりそれがまた目標が高くなる、という作用もその構造の中に入ってくるかもしれない。目標については様々

の要因が絡み合っているようで、今後さらに検討が必要である。

## 5-3 異文化接触時の態度、自国自文化に対する肯定感情と自己に関する意識

⑥の、目標の高さは自文化日本文化に対する態度に影響されるだろう、⑦自国自文化に対する肯定感とは適応感に対して促進的に働くであろう、という仮説について検討する。

⑦「自国自文化肯定意識」は「適応感」に対して促進的に働くだろうという仮説は検証されなかった。相関は低く、また重回帰分析結果からも直接の説明力は見いだせなかった。自己の文化を肯定的に見ていれば見るほど自己の行動に自信があり、従って生活スキルの不足から周囲との摩擦が起こっても動揺は少なく不適応を感じることは少ないだろうと予測したのであるが、このあいだには一定の関連は見られないという結果であった。しかし「自国自文化肯定意識」は「適応感」以外のすべての尺度と低い相関がみられた。この尺度は項目数が少なかったことなどから他の尺度と比較するとCronbachの $\alpha$ 係数が $\alpha = .62$ と低くなっており、この尺度と他の尺度の間には相関関係の希薄化が起こっていることが考えられ、実際にはこの数値から受ける印象よりは強い相関があると見てもいいかも知れない。このことを加味して解釈すると、「自国自文化肯定意識」は個人が基本的に持っている確固としたあまり揺れ動くことのない意識であると考えられ、異文化接触のような際にはそれは自己のあり方に対する意識、自己の能力に対する意識、自己の行動を決定することなどに常に影響を及ぼし続けているのであるが、その影響は表立たず本人にもあまり意識されることなく、間接的影響をすべてにおよぼすというような性格のものではないかと考えられる。また、今回の研究の被験者の半数近くが中国人であり、中華思想といわれる中国文化は最も優れた中心的な文化であるという中国に伝統的な思想と、現実の中国からの学生は社会体制の違いに戸惑うことも多くまた経済的にも困難を感じているものが多いという被験者の背景が、今回の結果には影響している可能性も高いと考えられる。中国からの学生は「自国自文化肯定意識」が有意に高く、「自己効力感」も有意に高かったにもかかわらず「適応感」は有意に低かったという結果からそのことが示唆される。この点についてはアジア以外からの留学生をも対象にした調査により、国別比較をして検討する必要がある。今後の大きな課題である。

⑥「社会生活スキル目標」に対する異文化接触時の態度については異文化への態度別に見た平均値の差の検定

では目標の高さと「現在の自己効力感」とに有意な差が認められ、この二つとの間に何らかの関連があることが示唆される。

重回帰分析では、「適応感」に対して、日本文化への態度（積極性）の有意な寄与がみとめられた。日本社会のまたは日本人のやり方を学び、積極的に日本社会とかかわってこうとする態度が強ければ強いほど「適応感」は高いということになる。この概念は「自国自文化肯定意識」と同一ではないが重なる部分も多い。前述のように「自国自文化肯定意識」については「適応感」との関連は見いだせなかったが、相手文化への積極性は適応のよさに肯定的な寄与をするという結果を見いだした。相手文化圏での生活スキルの不足感が「適応感」に及ぼす否定的影響よりも、学びたい相手文化の中に身をおいているということの満足感からくる肯定的影響の方が、「適応感」に対してより大きいと解釈することが出来るだろう。

#### 5-4 今後の課題

本研究では外国人学生の異文化に接しながら生活する際の自己効力感、社会生活スキルなどの自己の能力や自国自文化等に関する意識と適応感の関係に焦点が当てられた。「自国自文化肯定意識」、「現在の自己効力感」、「自国での自己効力感」、「現在の社会生活スキル」、「自国での社会生活スキル」、「社会生活スキル目標」などが測定され、「適応感」との関連が考察された。デモグラフィック要因を加えた検討によっても、それらの要因とともに「適応感」に対するこれら内的要因の寄与は大きいことが見いだされた。「適応感」に対して寄与が大きかったのは、「現在の自己効力感」、経済状態、「現在の社会生活スキル」、「自国での社会生活スキル」、「日本文化への積極性」、「日本での社会生活スキル目標」の順であった。

これら自己に関する意識はその相互の間に相関があるものが多く、互いに影響しあっている関係が認められるが、今回の報告ではその互いの関連の様子を明らかにするには至らなかった。

本研究によって自己の内面的環境に対する適応は、物理的環境、社会文化的環境に対する適応に劣らず適応を考える際に大切であることが裏付けられた。適応を論ずる際には多面的な、その構造を考慮した巨視的なとらえ方が必要だということをあらためて確認した。

この研究では解明できなかったまだまだ多くの課題が残されている。その一つは、より個人のレベルに近いでの自己に対するとらえの変化と適応感との関係の検討である。個人の不適応状態から適応状態に至るまでの

プロセスを詳細に検討することによって、量的研究とはまた異なった視点から、適応と自己認知との関係を検討することができるだろう。

本研究は長期にわたる変化についての検討ができるような計画ではなかった。異文化適応についてはその時間的経過との関連で論じなければならないところも多く、縦断的な調査により自己に対する意識の時間的な変化を追うことにより解明される点も多いと思われる。

## 引用文献

- Argyle, M. 1979 Interaction skills and social competence. In P. Feldman & J. Orford (ed.), *Psychological problems: The social context*. Wiley.
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Bandura, A., Adams, N. E., & Beyer 1977 Cognitive processes mediating behavior change. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 125-139.
- Bandura, Adams, Harddy, & Howells, 1980 Tests of the generality of self-efficacy theory. *Cognitive Therapy and Research*, 4, 39-66.
- ボック P. K. 江淵一公 (訳) 1977 現代文化人類学入門 講談社学術文庫 (Bock P. K. 1974 *Modern cultural anthropology: An introduction*. 2nd ed, New York: Alfred A. Knopf Inc.)
- Fontaine, G. 1986 Roles of social support systems in oversea relocation: Implication for intercultural training. *International Journal of Intercultural Relations*, 10, 103-116.
- Furnham, A., & Bochner, S. 1986 *Culture shock*. London: Methuen & Co. Ltd.
- 原 裕視 1985 異文化衝撃とその影響 生活環境とストレス 講座生活ストレス 3, 2.
- 原 裕視 1987 海外勤務者のリエントリーに伴う問題と対策 星野命・斉藤耕二・菊池章夫 (編) 異文化とのかかわり 川島書店 67-97.
- ヒックス・ジョーゼフ 1988 日本における外国人留学生の適応に関する研究—対人関係を中心として— 広島大学教育学部博士論文
- 近藤 裕 1981 カルチュア・ショックの心理 創元社
- 岩男寿美子・萩原 滋 1988 日本で学ぶ留学生 社会

心理学的分析 勁草書房

菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店

モイヤー康子 1987 心理ストレスの要因と対処の仕方：  
在日留学生の場合 異文化間教育 1, 81-97.

斉藤耕二 1988 帰国子女の適応と教育—異文化間心理  
学からのアプローチ 社会心理学研究 3 (2),  
12-19.

佐野秀樹 1990 異文化社会への適応困難に関する研究  
—社会場面に関する分析— 行動療法研究 16 (1),  
37-44.

桜井茂男 1987 自己効力感が学業成績に及ぼす影響  
教育心理研究, 35, 140-145.

Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B.,  
Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R.  
W. 1982 The Self-efficacy Scale: Construction  
and validation. Psychological Reports, 51,  
663-671.

Taft, R. 1977 Coping with unfamiliar cultures. In  
Neil Warren (Ed.), Studies in cross-cultural  
Psychology Vol. 1, New York: Academic, Pp.  
121-153.

高井次郎 1991 在日留学生の異文化交流仮説に関する  
研究—ソーシャル・サポートを中心に— 日本社会

心理学会第32回大会発表論文集, 364-367.

田中共子・高井次郎・神山貴弥・村中千穂・藤原武弘  
1990 在日外国人留学生の適応に関する研究 (2)  
—異文化適応尺度の因子構造の検討—広島大学総合  
科学部紀要 III (14), 77-94.

田中共子・藤原武弘 1992 在日留学生の対人行動上の  
困難—異文化適応を促進するための日本のソーシャ  
ル・スキルの検討— 社会心理学研究 7 (2),  
92-101.

上原麻子 1988 留学生の異文化適応 —言語習得及  
び異文化適応の理論的・実践的研究— 広島大学  
教育学部日本語教育学科・留学生日本語教育,  
111-124.

上原麻子 1992 外国人留学生の日本語上達と適応に関  
する基礎的研究 平成2年度科学研究費補助金研究  
成果報告書

山本多喜司(研究代表者) 1986 異文化環境への適応  
に関する環境心理学的研究 昭和60年度科学研究費  
補助金研究成果報告書

姚 霞玲・松原達哉 1990 留学生のストレスに関する  
研究 (1) —生活ストレスを中心に— 学生相  
談研究 11 (1), 1-11.

(1996年9月13日 受稿)

## ABSTRACT

### International students' feelings of adjustment in Japanese society

Saiko HAYASHI

The purpose of the present study was to examine how self-perception and cultural attitude influence on the international students' feelings of adjustment. Students in 7 Japanese language schools mainly from Asian countries answered the questionnaire. Items were about (1) attitude to own/host culture, (2) positive feeling toward own country/culture, (3) self-efficacy and social life skills in their own countries and (4) self-efficacy, social life skills, expecting level of social life skills and feelings of adjustment in Japan. 383 data were analysed.

Hypothesis ①「self-efficacy would be affected by social life skills」 and ②「self-efficacy would make feelings of adjustment higher」 were verified. Hypothesis ③「self-efficacy in their own country would make positive feelings toward their own country/culture」 higher, ④「self-efficacy in Japan would be lower than self-efficacy in their own countries」 and ⑦「positive feelings toward their own country/culture would make feelings of adjustment stronger」 were not verified. Although hypothesis ⑥「expecting level of social life skills would be influenced by attitude to own/host culture」 was not verified, some relation between the two was suggested.

The importance of the self-perception and cultural attitude in consideration of feelings of adjustment in different culture was discussed.

Key words : overseas-experience, self-perception, feelings of adjustment, self-efficacy, international students in Japan